

ロールシャッハ図版に対する感覚的印象の分析

— S D法による評定値と情動水準との関連 —

辻 本 英 夫

問題と目的

Semantic Differential (S D) 法は、本来、概念(刺激あるいは対象)の内包的意味を数量的に把握するための方法であるが、広く刺激や対象の特性を探る手段として、さらには、“態度”という被験者の特性を探る手段として、広範囲な領域で応用されている。

このS D法は、ロールシャッハ研究にも応用され、これまで主として、ロールシャッハ図版の内包的意味を探る手段として、あるいは内包的意味を従属変数とした、色彩の効果や父親・母親カード等のロールシャッハ図版についての臨床的仮説の検討のための方法としてもちいられてきた。

本研究では、従来の研究と視点をかえて、このようなロールシャッハ図版という刺激の特性を探るための方法としてではなく、被験者の内的要因を探るための方法としてS D法をとらえる。そして、ロールシャッハ図版にS D法を適用して得られる評定値が表わすものを、“ロールシャッハ図版に対する感覚的印象”と呼ぶ。ロールシャッハ研究の領域での、このようなS D法のとらえ方の可能性・意義については、すでに岡部(1960)、高橋(1967)、高柳・鮎戸(1962)らによって指摘されているが、ロールシャッハ図版に対するどのような感覚的印象がどのような内的要因と関連しているのかは、ほとんど明らかにされていないというのが現状である。

本研究では、Osgood(1962)の主張とロールシャッハ図版の色彩の効果についての知見による示唆に基づいて、ロールシャッハ図版に対する感覚的印象に影響を与える内的要因の1つとして、情動の喚起されやすさという内的要因——“情動水準”を考える。そして、ロールシャッハ図版に対する感覚的印象と情動水準との間に、関連があるか、あるとすればどのような関連があるかを、次の3点に問題をしばって検討した。

1. ロールシャッハ図版に対する感覚的印象を縮約する次元が、情動を構成する次元と対応するかどうか。
2. ロールシャッハ図版に対する感覚的印象自体に、どのような個人差があるか。
3. 得られた感覚的印象の個人差のパターンと、情動水準の1つである不安水準との間に、どのような関連がみられるか。

方法

被験者 大学生126名(男子63名、女子63名)。

呈示刺激 実験ⅠとⅡでもちいた呈示刺激は、ロールシャッハ原図版10枚(実験Ⅰ)と、代表的な情動語“喜び”“驚き”“恐れ”“怒り”“嫌悪”“軽蔑”“不安”(実験Ⅱ)。

評定尺度 実験ⅠとⅡでもちいた尺度は、情緒的評価因子・活動性因子・勢力因子を代表する形容詞対の中から、それぞれ4対ずつ計12対を選択し、7段階尺度として構成した。

手続き フェイス・シートに記入させた後、以下の3つの実験を順に行なった。実験はすべて個別実験。

実験Ⅰ ロールシャッハ図版の評定

実験Ⅱ 情動語の評定

実験Ⅲ 顕在性不安検査(MAS)の実施

感覚的印象と情動との次元間の関連

実験ⅠとⅡで得られた評定値により、ロールシャッハ図版と尺度の組み合わせごと及び情動語と尺度の組み合わせごと平均評定値を算出して、それぞれ因子分析を行なった結果、ロールシャッハ図版に対する感覚的印象の次元・情動語の次元として、ともに、情緒的評価・活動性・勢力という基本的に一致した3次元を得た。

また、この情動語の次元の性格を因子得点によって検討し、さらにSchlosberg(1954)の示した情動の3次元(“快—不快”“賦活水準”“注目—拒否”)と比較することによって、“情緒的評価”と“快—不快”、“活動性”と“賦活水準”とは本質的には同一の次元であるけれども、“勢力”と“注目—拒否”とは全く異なる次元であるという結果を得た。

これらの結果を総合して、ロールシャッハ図版に対する感覚的印象の次元と情動の次元との間の対応関係について、“勢力”と“注目—拒否”とは同一の次元であると認められないが、他の2次元間については対応しているという結論を得た。すなわち、ロールシャッハ図版に対する感覚的印象の“情緒的評価”と“活動性”の次元は、それぞれ情動の“快—不快”“賦活水準”の次元と本質的に同一であると考えられる。

感覚的印象の個人差

実験Ⅰで得られた評定値によってあらわされるロールシャッハ図版に対する感覚的印象の個人差を、田中（1964）の指摘する“尺度の使われ方”“尺度上の評価”という2つのレベルに分けて検討した。

“尺度の使われ方”の個人差を検討するために、被験者ごとに尺度間相関係数を算出し、これを変数としてQモード因子分析を行なった。その結果、1因子のみが抽出され、“尺度の使われ方”というレベルでの個人差はほとんどないことが示された。さらに、ほとんどの被験者に共通した尺度の使われ方が、ロールシャッハ図版と尺度の組み合わせごとの平均評定値の因子分析の結果に示された尺度の使われ方と、ほぼ同じであることも認められた。従って、ロールシャッハ図版に対する感覚的印象が、情緒的評価・活動性・勢力の3次元に縮約されることが保証された。

この結果に基づき、被験者・図版ごとに、各次元を代表するそれぞれ4対の尺度の評定値の平均を、因子価として求めた。

“尺度上の評価”の個人差を検討するために、図版ごとに、求めた3種類の因子価をもちいて被験者のクラスター分析を行なった。その結果、それぞれ7～12のクラスターが見い出され、個々のロールシャッハ図版から受ける感覚的印象には個人差があるということと同時に、ロールシャッハ図版に対する感覚的印象は、被験者ごとに全く異なるのではなく、ある程度の共通性があるということが示された。

感覚的印象と不安水準との関連

ロールシャッハ図版に対する感覚的印象と不安水準との関連を検討するために、実験Ⅲで得られたMASの不安得点によって被験者を3群（高不安群・普通群・低不安群）に分け、この3群と先に得られた被験者のクラスターとを変数として、図版ごとに両変数間の関連を調べるためにカイ自乗による独立性の検定を行なった。その結果、どの図版においても、両変数間に有意な関連が示されなかった。そこで、さらに、高不安群・低不安群・普通群間の個々の因子価の平均の差について、分散分析と多範囲検定を行なった。

その結果、いくつかの図版・次元において有意差が認められた。また、高不安群と低不安群とは、ロールシャッハ図版に対して、類似した感覚的印象をもつ傾向があることが示された。この理由として、低不安群の被験者

は、不安水準が低いのではなく不安を抑圧して意識しないために、その不安水準の高さがMASではとらえられないということ、従って、低不安群も不安水準の高い群と言えるのではないかということが考えられる。

この推測に基づいて、結果の解釈を行ない、ロールシャッハ図版に対する感覚的印象と不安水準との関連について、次の2点が得られた。

1つには、両者の関連の度合・関連の仕方が、次元によって異なるということである。すなわち、勢力次元に最も不安水準が影響しやすく、次いで活動性次元であり、本研究の結果からは、情緒的評価次元はほとんど不安水準と関連をもたないと思われる。また、勢力次元について、不安水準が高い者はより“強い”という印象をもちやすいことが示され、これは不安水準が高い者がより自己不全感が強いためであることが、そして、活動性次元については、不安水準が高い者はより“不活発な”印象をもちやすいことが示され、これは被験者自身の賦活水準の低下が影響するためであることが、それぞれ考えられる。

また1つには、両者の関連の度合が、図版によって異なるということである。すなわち、図版Ⅱ・Ⅵ・Ⅷについて、これらの図版に対する感覚的印象が、不安水準によって影響されやすいことが示された。このことは、不安水準の高い者が、色彩の出現や濃淡によって影響されやすいのではないかと、ということを示唆する。

結 論

ロールシャッハ図版に対する感覚的印象と情動水準との関連について、以上の結果を総合した検討を行ない、本研究の結論として、以下の3点を得た。

1. ロールシャッハ図版に対する感覚的印象と情動水準との間には、関連がある。
2. その関連の度合は、図版によって異なる。
3. ロールシャッハ図版に対する感覚的印象の活動性次元・勢力次元は、それぞれ、被験者が喚起しやすい情動（情動水準が高い情動）に応じた賦活水準と能力感に影響される。

しかしながら、これらの結論は、そのかなりの部分が、不安水準だけとの関連の検討から導き出されたものであり、さらに、低不安群は実際には不安水準が高いという推測を前提とした推論に基づいている、という点に限界をもつ。従って、これらの結論については、むしろ今後の検討のための1つの仮説と考えたい。